

宮島新三郎
有富郁夫 共編
萬福直清

現代
日本

文學鑑賞讀本

冬・秋・夏・春
(冊一組四)

昭和十六年九月二十日十六版

(不許翻製)

現代文學鑑賞讀本 (四冊二組)

定價 二圓八十錢

編者 官島新三 萬富直夫 福原一雄

發行者 殿原一雄

印刷者 渡邊丑之助

東京市本郷區千駄木町二一〇

發行所 帝國書籍協會

支店會員特設部 一九〇九番
電話駒込二〇一二番
振替東京五九三三九番

郵船元

日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二ノ九

昭和十六年九月二十日印刷
昭和十六年九月廿五日發行

文化が進むに従つて、あらゆるものに對する解釋が變つて行くのは極めて當然のことである。教育なる概念もまた此の例にもれず、教へることから指導に變り、更に創造といふ言葉で説明される所まで進んで來た。顧みれば、我が國語教育界も、注入から次第に體驗へと押し移りつゝある。近來人々が覺醒して、従來の國語教育に不満を抱く様になつて來たことは、甚だ喜ばしい現象である。人々は今や、教科書を唯一の寶典と考へることが出来なくなつてゐる。それは副讀本に類する出版物が盛に現はれつゝあることによつてもわかる。しかも、此の種の書類が、相當に歡迎されつゝあることは、如何に人々が、現行の教科書に不満を抱いてゐるかを證してゐる。即ち現行教科書によつて、己の慾求を充たすことの出来ない人々は、副讀本によつて之を補はふとするのである。副讀本の出現は、當局の指揮をのみ俟つといふ舊式な態度から一步進んだ現象で所謂教育運動の民衆化である。私共は此の運動がやがて當局の心を動かして、國語の教科書が大々的に改革されることをこひれがふものである。だが、今日は教科書に多くを期待するよりも、副讀本を出來るだけ活用することの方が、より以上の急務ではないか。此の意味に於て、近來鑑賞といふ聲の高まつた事は結構な事である。

一體、鑑賞は名文があつてこそ始めてなし得られる事である。而して多くの副讀本には、古今の名作が蒐めてあるやうに思はれる。しかし乍ら、その殆んど大部分が、作品中の一節を抜萃したものであるのは、我々の不満に思ふ所である。一體傑作なるものは、その作品の一部分が巧みな文章で描かれてゐるのではなくて、作者の深い思想が、全篇を買

いてゐて、自ら讀者を魅するのである。思想を取去つて名文はあり得ない。従つて思想を無視した鑑賞もない筈である。近頃鑑賞を説く爲めに、字義の羅穿など事々しく述べ立てる人がある。私共は、それを非難するのではないが、それよりもむしろ多くの名作を讀んで作者の思想感情に接することの方がもつと大切だと思ふ。作者の思想感情に接するのはこの體驗である。鑑賞の定義はこの體驗によつてひとりてに出來上る。在來の副讀本が多く名篇の一部分を抜いたものであるにも拘はらず本書に於て、短篇小説の全篇を掲げたのは、此の思想を基礎に置いての鑑賞を完らしめたいからである。抑々短篇小説は、長篇小説の一部分ではなくて、一篇それ自身が立派な獨立した作品である。殊に暗示に富んだ力強い作品は、短篇の中に多いといふ事實から考へるならば、私共の此の企ては決して無意味なものではなからうと思ふ。併し乍ら、作品の一部分であつて、しかし立派な一篇をなすものもあり、一節のみを讀んでも幾多の暗示を與へてくれるものもある。だから、本書は短篇小説を主にしたとは云へ、さうした名文や、詩歌をも輯録して置いた。讀者諸君が下欄と、各篇末尾の批評とを參考にして出來る丈本書を利用せらるゝことは、編者の最も望む處である。

短篇小説を原作の儘教育界に入れたのは、我が國では新しい試みかと思ふ。又、從來この種の讀本が、文の良い方面のみを高潮する傾きがあつたにも拘はらず、儼正な批評的態度をとつたのも、一寸類例のないことである。従つて、これらの原因から來る缺陷の多いであらうことを恐れる。讀者は、讀者諸君の御要求と、諸家の御叱正を切望するものである。

現代
日本文學鑑賞讀本

(春)

春 目 次

- 一 辨 當……(短篇小説)……………加藤武雄……………五
- 二 出 發……(短篇小説)……………加藤武雄……………九
- 三 落 葉 松……(詩)……………北原白秋……………四二
- 四 鬼怒川沿岸……(土の一節)……………長塚節……………四六
- 五 輕便鐵道……(短篇小説)……………志賀直哉……………五三
- 六 流行感冒と石……(短篇小説)……………志賀直哉……………六六
- 七 水の上の雪……(短歌)……………茂吉・赤彦・千
櫻・章吉・文明……………一二二
- 八 法隆寺の宿屋……(小品文)……………高濱虛子……………一四
- 九 雙手は神の聖膝の上に……(詩)……………日夏耿之介……………二九
- 一〇 寒 竹……(詩)……………室生犀星……………一三〇

- 二 トロツコ……(短篇小説)……………芥川龍之介…一三三
- 三 蜜 柑……(短篇小説)……………芥川龍之介…一三九
- 四 石工の歌……(詩)……………福田正夫…一四八
- 五 利根川の土手……(田舎教師の一節)……………田山花袋…一五〇
- 六 濤 聲……(詩)……………佐藤惣之助…一五〇
- 七 ポ チ……(平凡の一節)……………長谷川 二葉亭…一五九

凡 例

一 本書は實業補習學校・小學校・中學校・高等女學校・師範學校・農業學校・工業學校等の國語副讀本、又は青年會處女會等の讀物として、専ら學生の高尙純雅なる文學趣味を養成し、且つ現代の言語文章に對する鋭敏なる感受性を陶冶する爲に編纂したものである。

一 本書は前項の目的を達する爲に、作家の思想感情を探究し評論し、且つ人生を全體的に理解し玩味するに足る短篇小説（主として）を凡そ次の標準に據つて採擇した。

(一) 明治・大正の中心作家にして健實な人格と地盤とを有する人々の作品の全部又は其の一部。

(二) 前作家の作品中最も優れて藝術味の餘かな、教育的價値の大なる、人生の暗示に富み、且つ學生の道德的感情を内面から刺激するに足るもの。

(三) 學生の檢閲に接近したもの、若しくは特に學生の興味を惹くべきもの。

(四) なるべく田園趣味に富んだもの。

一 同一作家の作品は、同一の場所に排列して作家の小傳と其の作風を略説し、そして作品は欄外に於て其の表現を鑑賞し、篇末に於て其の作意を説き、其の内容思想を評論した。

一 前項の小傳・鑑賞及び評論等は、主として教師の參考として記述したものであるが、學生にも之を讀ませて作品を理解玩味せしむることは、編者の最も望む所である。けれども鑑賞と評論とは、人によつて各々異なるべきものであ

るから、必ずしも此の鑑賞評論に拘泥するには及ばない。
一 明治・大正に於て名文と稱せられ、又は名文と稱すべき小品文、又は長篇小説の一節處に詩や和歌等を各所に挿入して置いた。これは短篇小説の單調に陥ることを防ぐためである。

一 辨 當
二 出 發

加 藤 武 雄

加藤武雄について

加藤武雄氏は明治廿一年五月、神奈川縣津久井郡川尻村に孤々の聲をあげた。郷里の小學校を卒業したのは、明治三十五年で卒業後數年間小學校の教師を勤めてゐた。そして明治四十三年に上京し、新潮社に入つて、今日に及んだ。氏は疾くから創作に志して、雜誌文章世界の創刊號からの投書家として、達筆を揮ひ、田山花袋氏あたりから大に矚望されてゐた。當時文章世界は文藝界に於ける第一流の雜誌で、前記花袋氏や前田木城氏等が、盛に自然主義の思想や感情などを鼓吹して、青年の血を燃え立たせてゐたものである。當時多くの文學青年は、それに刺戟されて感激した。加藤氏も亦其の一人である。だから氏は良い意味でも悪い意味でも、最も多く自然主義の影



響を蒙つたと言はねばならぬ。けれども氏は後に殆ど此の自然主義から離れようとする傾向を帯びて來た。氏が新進作家として重せらるるに至つたのはこれから後のことであつた。

氏は晩熟の作家である。従つてその作品は如何にも其礎がしつかりしてゐて、ちやうど鐵筋コンクリートでかためたビルディングの様に安全な印象を與へる。氏の作品が丹念に描寫し説明されてゐることは、明かに自然主義の影響によるのであるが、氏は更にその境地を一步深めて同時にその内容をも裏付けてゐる。描寫のための描寫や説明のための説明などは、氏の最も嫌ふ所である。氏は又文章上如何にして氣分を正しく表はさうかと苦心する。それはともすれば文章のための文章に陥り易い所もあるが、近來氏の文章は次第に健全になつて來た。氏には長篇「惱ましき春」「久遠の像」「東京の顔」「廢園の花」「都會へ」「煉獄の火」や、短篇集「郷愁」「夢見る日」「處女の死」「幸福の國へ」「祭の夜の出來事」「嗚咽」等の著があるが、氏は小學教師をしてゐた經驗があるので、子供を題材にした作品が多い。次に掲げた「出發」は實に氏の出世作で又代表作である。

辨 當

加 藤 武 雄 作

學校の近くに家をもつてゐる子供は、晝飯ひるめしを食べに歸る。遠いところから來る子供は、皆辨當べんたうを携たづへて來る。辨當べんたうを食べる時、教師も彼等と同じ部屋へやで、一緒に食べることになつてゐた。

この十日ばかり前に、補缺ほけつで此の級にはいつたKといふ少年があつた。隣村りんそんにあつた生家うぢが、父の死によつて没落ぼつらくしたため、此の村の伯父おぢの家に寄食きしよくすることになつたのだといふことであつた。Kは此の學校の通學區域の最長距離きさうきりにある或部落あるむらから通つて來てゐた。だから、晝飯ひるめしを喰たべに歸れるわけはない。然るに彼は辨當べんたうの時間に顔を見せたことがない。それを不思議しぎに思つてゐた私は、ある日、辨當べんたうの時間に窓の下の板壁いたかべに寄りかかつてばんやりしてゐるKの姿すがたを見つけた。

此の書き出しがうまい。むだがなく、説明とは趣おもむを異ちがにしてゐる。

*印象的な表はし
かたがしてゐる。
なやましい、不安
な心の姿が表はれ
てゐる。

*先生！ 僕はお腹が減らないんです！

Kは私の間に先んじて斯う云つた。彼は眼のくると圓い、而して皮膚の青白い西洋人の子のやうな感じのする元氣のいゝ少年だつた。

「さうか、腹が減らないのか？——だが、飯を喰はないと身體に悪いな。辨當を持つて來給へ。」

私はさう云つた。

「でも、腹が減らないんです。」

「いや、そんな事はない。飯を喰はないで腹が減らないといふのは、うそだ。うそをついてはいけない。」と、今度は多少叱責の意味を籠めて、私はかう云つた。Kはすこし、顔を赤くして、押黙つて了つた。

相變らず、辨當を持つて來ないKに對して、私は再三再四、注意をし、寧ろ叱責を繰返した。

*心にひけを感じてゐる純な少年の心理が此の一言にこもつてゐる。

皮膚の青白いのと元氣の合つてのKの印象を混亂せしめてゐる。

作者たる教師の言對して深い情が、ないやうに感じられる。「でも」といふ一語の中にKの意志の強さが含まれてゐる。

教師は深く同情して叱るのでなく、ただ子供を取りつまる便宜から叱つたやうに思はれる。

それから一週間ばかり後に、Kはたうとう辨當を持つて來た。が、彼は辨當の包みを部いたか開かないで、ほんの二口ばかり口を動かしたただけでもう食事を了つてしまつた。

その次の日、彼が辨當の包みを開いた時、彼の周圍から、忍びやかな笑ひ聲が起つた。と、彼は急に大きな聲で叫び出した。

「おれの辨當は稗の團子だあ！ 稗の團子は甘いぞ！ 甘いぞ！」顔を眞赤にしたKは、今手に眞黒な稗の團子——粗食を厭はない此の邊の百姓達の中でも、人前に出せない下等な食物とされてゐる、その稗の團子を捧げるやうにしながら、かう繰返すのであつた。激しい羞耻感、その羞耻感へ逆襲する満身の努力で、彼の顔は奇妙にひきゆがめられ、彼の眼は、さら／＼と輝いてゐるのであつた。

「おれの辨當——稗の團子！ 稗の團子うまいぞ！ うまいぞ！」

Kは餘程考へた後に辨當を持つて來るものである。ここは次の伏線となつてゐる。

「忍びやかな笑ひ聲」と急に大きな聲の心的状態を強く讀者の頭にしみ込ませる。其言ふ詞には、恥づかしがつてゐる心持がよく表はれてゐる。Kの意氣の昂つた様子^{まへ}が表はれてゐる。羞耻感^{はづかし}はづかしい心持。

隠してゐたことがみんなに暴露されて、云ふ此の言葉

健氣な少年であつたKは、今亞米利加に居て、富を成してゐるさうである。私はこの話を想ひ出して、坐に微笑を禁じ得ない。が、あの時、感じた胸の痛は、今もなほ、かすかに私に残つてゐるのである。

批評

苦悶や苦痛が形をかへて華やかな姿となつて来る、闇から明るくなる作品である——Kは父親を失つた、哀れな少年である。自己の貧乏生活を隠し／＼して、他の子供達と同様に装はうとつとめるKの苦心も、辨當を學校で食べなければならぬ事情の爲に、遂に水泡に歸した。我々は彼が單に貧困兒であるといふ理由でなくて、それを何とかして人に知らずまい／＼と苦心する所に、生活の深さと同情を感じるのである。Kが先生に對して「先生！ 僕はお腹が減らないんです」といふ所や、たうとう辨當を持つて來たが「辨當の包を開くか開かないで、ほんの二口ばかり口を動かしただけで、もう食事を了つてしまつた」所などに、その苦心はよくあらはれてゐる。けれどもその苦心も遂に破れた。同級生は、彼を笑つた、しかも忍びやかに。心にひけを感じたKの心理は一變した。強い侮辱を受けたKの心は、極度の自暴自棄的な氣味になつた。そして大聲で云つた「おれの辨當は秤の團子だ！ 秤の團子は甘いぞ！ 甘いぞ！」此の一時の光景は何と悲痛なものであらう。此の時の所謂「窮鼠猫を噛む」がやうな力は、讀者に同情——といふよりもむしろKに對して嚴肅な感じを誘發させる。今は彼が亞米利加で富をなしてゐるといふこと、對照して、一種の痛快な氣分が漲つて來る。一讀して讀者に與へる感じは、元氣な意志の強い子供であるといふことである。貧困の家に生れて父を失ひ、伯父の家——これも貧困なことが推察される——に育ち、そして貧困のつらさは骨髓に徹してゐる。しかし、此の子供は其の周圍に對して少しも反抗的の氣味はない、純良な子供である。さうかといつて所謂「品行方正」といふやうな元氣のない子供ではない。——讀者に勇氣を附け、人生の艱難なふみやぶつて行けと云ふ感じを與へる作品である。

は、Kの心に同情を呼ぶ。

出發

加藤武雄作

私は朝飯をすますと、縁側の藤椅子に身體を投げ掛けて、久振に得られた今日の一日の閑暇をどうして費さうかと考へた。此の二十日許り忙しい仕事のために、傍目も振らずに働いてゐるうち、花の騒ぎもいつの間にか止んで、山の手の屋敷町は、青葉の影のしつとりした、静かな初夏の世界になつてゐた。今年の春ももう去つて了つたといふ淡い感傷的な心持と共に、のび／＼とした大きな落着を感じながら、私はゆつくりと二三本の煙草を吸つた。

さて、今日はどうしよう。——私は新聞を取り上げて、芝居の便などをあさつて見たが、別に興味を引くものもなかつた。ちかちかと痛くなつた眼を新聞から離して、庭の面にうつすと、垣根の傍の椿の花は、眞盛り

私はといふ人は東
京の山手に住ん
で會社が役所に
あるらしい。

のび／＼とした大
きな落着には晩春
の氣持がうまくに
じみ出てゐる。

此のあたり、春か
ら夏への時の推移
を表はすやうな草
木の名が出てゐる
が、前の「のび」の
びと程にその氣分
着て出た程にその
明は描寫程の方が